ポール・モレルと三人の女性

――D・H・ロレンスについての解説的な批評 (1)――

高城楢秀

『息子と恋人』は、D・H・ロレンスが二十八歳の年に出版した半自伝的小説である。小説中の主人公ポール・モレルは作者の青春像であり、虚構と事実との間に隙のないほど類似している。そしてポールの母親はロレンスの母その人ではないが、少くとも作者がその常軌を逸した母子関係を通して、母だと思つた女性であることに間違いない。

この小説において、ポール母子はただの親子の関係をこえて、一種の恋愛状態におちいつていた。母親モレル夫人は夫に失望して、夫の身代りに息子を熱愛するようになつている。あるいは、子供を楯にして家庭内で夫に対抗しているともいえる。もともとポールの両親は恋愛結婚をしたのであるが、夫婦の気持の食い違いがあまりにひどくて、ポールの生れるまえから不和になり、互に争い合つていた。母親は血統的にピューリタンの道徳感を承け継いでいて、夫にたいして不寛容な妻である。彼女は夫を愛していたが（いや、愛したことがあつたが）夫が些細な罪を犯しても許さず、夫が酒を飲んだり、嘘をついたり、度々卑怯な振舞いをすると容赦なく責めた。といつても母親の夫にたいする愛情が薄かつたのではない。一口で言えば、彼女の愛情の表現が彼女をして夫に不寛容な妻の役割を演じさせたのである。一方、夫は英国の田舎町の坑夫で、善良だが粗野な本能的な男である。そして彼もまた妻を愛していたが（いや、彼もまた妻を愛したことがあつたが）平凡な坑夫らしい生活を享楽したいとおもつていて、妻の厳しい道徳感から逃げ出そうと苛立つている。

ポールの母親の愛情は、まず夫を高尚にしようとする夢となり、それが破れてからは息子を熱愛するように変つてしまつた。作者ロレンスはこの夫婦の不和についてこう書いている。

「彼女があまりに彼と反対の性格であつたのは気の毒である。彼は少しばかりのものを持つていたかもしれないが、彼

女はそれに満足しなかつた。彼が当然多くのものを持つていなければならない、と期待した。彼女は彼を身の尺に合わないほど高尚にしようとして、彼を破滅させたのだ。彼女は我と我が身を損ね、傷つけたが、自分の価値をなに一つ失わなかつた。彼女には子供達がいたのだ。」（本文二五頁―二六頁）

ポールの青春の不幸はこの母親の異常な愛情に根ざしている。やがてポールが少女ミリアムと恋愛するようになると、彼は母と恋人に挾まれて自分の不幸を意識するようになる。だが彼の場合不幸という言葉はふさわしくない。この母親も息子もともに強烈な個性の持主であるからだ。不幸というよりは悲劇といつた方がよいかもしれない。ここで僕は、『息子と恋人』を批評する人なら必ず基礎的な資料にする、E・ガーネット宛の作者の書簡の一部を参考のために書いてみよう。これは一九一二年十一月十四日附になつている。

「この小説は次のアイディアに随つて書かれています。人物の優れた、洗練された一人の女性が、より低い階級に入つて、自分の生活に不満を感じています。この女は夫に情熱的な愛情をもつていました。そこでその子供達は情熱の結実で生命力に満ちています。ところが息子達が成長するにつれて彼女は彼等を恋人に選びます。――最初に長男を、それから次男を。これらの息子は母にたいする相互愛によつて、生きることの方へ追い進められます。……けれども大人になつたとき、彼等は恋愛できないのです――母が彼等の生活の中での最大の勢力であつて、彼等をしつかりつかまえているからです。……この青年達が女性に接触するや否や、忽ち破綻が生じます。……血で結ばれているために、母の力がだんだん強くなつてくるのです。この息子は自分の魂の方は母の手に残しておき、兄と同様に、肉体的情熱の方を求めていこうと決心します。彼は肉体的情熱を得ます。すると、また破綻がものを言いはじめます。しかし母は無意識に事態を悟つて、死にはじめます。息子は恋人を棄てて死にかけている母を看護します。結局彼はすべてを失つて、死の方向に漂つていくのです。これは偉大な悲劇です。そして、僕は偉大な本を書いたのだと申し上げます。これは英国の何千という青年の悲劇です。……」

この書簡は作者の自薦のそれであるが、三つの点で注意しなければならない。その第一は、作者自身が自分の小説のテーマを意識していることである。そしてさらに言えば、作者は二十数歳ではやくも青春の精神の図形を意識して、それを小説に定着させようと努力している。第二は、作者の母親にたいする優しいいたわりである。作者は、モレル夫人を描写するにあたつて、小説家の武器である客観的なリアリズムや冷笑的な諷刺をまだ充分に駆使していない。むしろ、実母にたいする愛情がそのまま作中のモレル夫人にまで延びている。これには作者の執筆の事情が直接に影響しているとも考えられる。ロレンスの母が死んだのは一九一〇年の暮れ近く

であり、彼がこの小説をはじめて執筆したのは一九一〇年から一一年の間である。つづいて翌年の春に第二稿を書き、夏から秋にかけて最終稿を完成している。そして最初のうちは、主人公の名をとつて『ポール・モレル』という題になつていたり、筋にも多少の異同があつたそうだが、ハリー・T・ムアーの研究によると、作者のモレル夫人にたいする描写態度は第一稿も最終稿も同じらしい。だから作者がこの小説を書こうとしたころは、作者が母の死によつて心の傷を受けて、それから徐々に回復しはじめていたと推定してもよいわけである。ロレンスにかぎらず多くの青年にとつて、母の死によつて受けた苦しみは、次第に亡き母を愛着しいたわる気持に変つていくものである。特に彼のように母と一種の恋愛状態にあれば、なおさらのことだろう。だがさらに一般的にみて、青年作家はいつも作中人物と実感的に交り、切つても切れない関係をつくる。よく言われることだが、実人生の情感が文学にあまりに投射されると作品に安定感が欠けてくる。小説に関するこの常識はそのまま正しい。しかし青年作家の場合この逆も度々起るのであつて、実人生の熾烈な情感がかえつて作品の純粋度を高めることもある。ロレンスが実在の母親と作品中のモレル夫人を小説的にたち切れず、モレル夫人を優しくいたわつていて、そのために『息子と恋人』の客観性を少し減じているのはたしかである。しかしその純粋性は彼の作品中で比類のないものだろう。この作品から十数年後に作者は、同じシチュエーションを短篇『可愛い女』でふたたび取り上げているが、これらの二つの作品を較べると、『息子と恋人』の純粋性がよく理解できる。後期のその短篇では純粋性が消え、残酷なリアリズムの筆法で母親である可愛い女の愛情の表裏が描写されている。

第三の問題は、作家が自分の小説のテーマを意識していても、そのテーマが作品そのものの本質を必ずしも決定するものでないということである。だがこの點については後で述べるとして、作者がポールの常軌を逸した母子関係を、自分の小説のアイディアとして考えていた事実に話を戻そう。この事実と第三の問題とは同じ出発点から出ていて、重なり合いやがて前者から後者が発展していく。作品の基礎的な精神の図形と、そのうえに出来上るモラルへの道程との関係だと言つて差支えないだろう。

ポールは母親の愛情に溺れていた。いや、むしろポールと母親とは恋愛していた。ある人々は、この母子関係を現代におけるエディプスの母子恋愛だと解釈している。勿論その解釈に異論をはさむ筋はないが、このようなフロイド的な解釈によつて、『息子と恋人』の本質が割り切れると考えれば愚しい話である。ポールの真実の生き方は、エディプス・コンプレックスの実例を精神医に提出するためにあるのではなくて、その環境を彼がいかに乗りこえていくかにある。つまり彼にとつて切実なモラルの発見である。

ポールは、彼が少女ミリアムと初恋をしたときに、母親の嫉妬を知つて悩む。「私には我慢できないんだよ。他の娘さんなら許せるけれど――あの娘は駄目よ。あの娘はお前を独占して、私になにも残してくれない。なにも――」(本文二六一頁)息子は母親にミリアムを愛していないと嘘をつく。それとともにポールは母親の愛情がいわゆる愛情的な優しさばかりでなく、その奥に逞しい支配慾を秘めているのに気附く。母親はしつかりと彼を握つている。母親はミリアムが息子を独占していると憎んでいるが、彼女こそが息子を独占しているのである。ところでこの母親はピューリタンであり、母子の恋愛という愛情関係は結局のところ精神の世界に限られてしまうものである。だからモレル夫人がいかに息子を独占しても、すべては極端な精神的恋愛になつてしまう。ポールはこうした母親の愛情の姿を知つていたから、母を愛する彼は、ミリアムと精神的に愛し合うことを無意識に避けている。だが、青年ポールが精神を母に委ねて、少女に肉体的な満足を求めていけるだろうか。たとえば、母の愛に甘えながら悧巧な青年達が、母とは別な女性をもとめて娼婦の愛に耽溺するように、ポールがミリアムと交渉できるだろうか。答はノウである。

彼はいま、自分にも不可解な憤りにとらわれる。彼は青春の生命力に満ち、しかも母親譲りの潔癖な道徳感を承け継いでいるのだ。彼の憤りとは、この生命力と潔癖の葛藤から生れてきたものである。精神を母親に委ねて、少女に肉体をもとめるにしては、彼の青春は全人的な愛情を必要としているし、彼の潔癖さが衛生学的な身の捌き方を厳しく拒否している。

ポールは童貞である。そして童貞の男だけがもつている女性にたいする優しさを知つている。

「彼は自分の周囲の人々を見廻した。彼が知つている人々のうちで、一番感じのよい男達は、彼と同じように自分の童貞に縛られて、そこから抜け出せずにいた。彼等は女に大層気兼ねして、女を傷つけたり、女に辛い思いをさせるよりは、いつまでも女を知らずに通した方が増しな感じがするのだつた。……」(本文三四一頁)

またポールはミリアムにたいして、「彼は彼女を恐れていた。男が女を求めるような風に、自分が彼女を求めているかもしれないという事実は、心の底に圧えつけられて羞恥心となつた。……」(本文二二一頁)

だがポールの憤りを解釈するためには、もつと複雑な彼の心理を理解しなければならない。彼にとつてミリアムは母親とは別の種類の女性である。しかも同時に、この少女は女という點において母親の同類であり、彼は少女と恋をしても、少女の顔のうえに母の顔を見るのである。夫に何の遠慮会釈もなく自分の秘密を奪われた母。そして夫に失望したみじめな母の顔を思いうかべるのである。そのために、ポールはミ

リアムにたいしてあまりに内気で、決断力を欠いている。彼はミリアムを苦しめるよりは、自分の童貞に耐えようとする。

ところが、ポールの青春の生命力は落ちつく先に落ちつかなければ、決して安定する種類のものではない。彼の憤りは自分の生命力と複雑な心の壁との葛藤から嵩じていく。そして彼は少女に辛く当るようになる。

一方、ミリアムは受身型の純潔趣味の少女である。一体に受身型の少女は、処女の危機をまもるために、恋愛を精神的に美化しようと無意識のうちに努めるものである。ミリアムもまた、ポールの臆病な、しかしいつ爆発するかもしれないような要求を恐れて、二人の恋愛を純潔なものに高めていこうとしている。だがここで僕はミリアムの性格をさらに詳しく書かねばならない。そしてミリアムの純潔趣味が、ヴィクトリア朝の末期的な環境のなかで育てあげられたものであることにまで筆を延ばして、この受身型の少女の美しい恋愛態度がたんなる処女の護身術でないことを説明しよう。ミリアムのモデルは作者ロレンスの幼な馴染みであり、初恋の女であつたジェシー・チェンバーズである。ジェシーは作者の生れ故郷の鉱業町の近くの農園に育つた。彼女は作者を愛し、作者の話を好み、その詩を喜んで読んだりしていた。ロレンスの詩をはじめて商業雑誌に送つて認めさせたのも彼女であり、後年E・Tという名で彼の思い出を書いたのも彼女である。『息子と恋人』を作者が執筆しているとき、作者はジェシーに初稿と二稿を送つていろいろと助言をもとめている。ムアーの研究によれば、作者はこの小説の『少年少女の恋』の章で十箇所ほど、彼女の助言を聞きいれて書き改めているそうである。その他にもつと全般的な批評も受けているようである。作者はジェシーにかぎらず、妻のフリーダの助言も得ているが、ジェシーの言葉はかなり素材的な意味において役立つているようである。もつともジェシーは最終稿をみて、作者が母親の肩をもつて自分を残酷に扱いすぎていると考えて、当惑し、狼狽した。「ロレンスは、私が彼の才能の成長に献げた年月を完全に忘れました。二人の共通の目的に私が献身したことのみが、彼の母の執拗な意地悪に対抗して、私達を結びつけていたのです。」と彼女は言つている。(ムアー研究書より)ジェシーはロレンスの人間を愛していて彼が小説家であることを忘れていた。あるいは理解できなかつたのだ。作者がこの小説で書いた少女はミリアムであつて、ジェシー自身ではなかつた。小説中のミリアムはあくまでミリアムである。それを理解できないジェシーは、ヴィクトリア朝的な表現で、自分の悲しみを誰を相手でもなく訴えている。

ジェシー・チェンバーズはともかくとして、この作中の少女ミリアムは、その時代に英国の田舎町の近くの農園に生れた少女らしく精神主義の雰囲気のなかで育つている。そして

恋愛を美しいもの高尚なものと考え、肉体を卑下して恥じている。少女はポールの苛立ちや憤りを感じ、不安になり、心配することができても、彼女には、恋人の青春の生理と心理は謎である。それでポールが母親と少女の愛情の板挟みになり、生命と極度な潔癖との葛藤にもまれても、彼女は自分の精神主義的な眼差しで見返すばかりなのだ。僕になにか足らないものがある。――まるで精神的な不具のようにね、とポールは自嘲する。青春の飢餓。加うるに、ポールも母親もミリアムも包む、英国の田舎町の恋愛道徳。それにこれらの二人の女の教養には、ヴィクトリア朝特有のピューリタン的な肉体蔑視の思想が流れている。

やがてポールはミリアムと肉体的に接触する。だがポールは一層憤り、不安になつていく。というのは、ポールが肉体をもとめたから、この少女はそれを許したのであり、彼女の心情は愛情よりは宗教的な犠牲者のそれに近い。まるで敵に向うごとくに四肢を硬ばらせ、受難の瞬間を乗り越そうとしているのである。少女の眼は信頼と受苦の混り合つた光を帯び、いつまでも恋人に愛情の責任を問うている。ポールは肉体が接触しているときにも、この白々しい少女を抱いていなければならない。白々しいと僕は言つた。冷い愛情というのではない。恋愛を美しい絵空事にしか考え得ない少女の、一心不乱な愛情のことを言つているつもりである。ポールは、「ほつておいてくれ、ほつておいてくれ」と、虚無にむかつて叫びたくなるのであつた。

この恋愛が冷えた直ぐその後に、ポールはクレアラ・ドーズと関係を持つようになる。クレアラはミリアムと違つて、個性の強い近代的な女性であり、また男を知つた女である。彼女は夫のバックスターとの間がうまくいかずに別居している。二人の恋愛の経過についてはここでは一応省略するとして、この恋愛が果してポールの精神の発展にどのように影響しただろうか。この恋愛はミリアムとクレアラが違つたタイプの女性であり、これが二度目の恋愛であるので前とは異つている。今度は母親モレル夫人の嫉妬があまり問題にならない。したがつて、作者がE・ガーネット宛に書いた手紙で意識したテーマで、さほどに説明され得ないわけである。つまりポールとクレアラは一対一の恋愛をしているのだ。そしてこの女性を相手に、ポールの精神は、近代人としての個性的な苦悩に悩み、その克服を目指して、彼個人に切実なモラルの発見に向おうとするのである。

ポールはクレアラと恋愛して、次のことを実感した。

㈠　青春の安定感。

このことについては、ポールがミリアムと接触したときの実感と、今度の場合とを比較すれば理解しやすい。

『君、ほんとに僕が欲しい？』と、彼は冷い影が自分に差したように言つた。

『ええ、ほんとうに』

ミリアムは非常に静かで落ちついていた。彼女は自分が、ポールのためになにかしてやつているのだという気しかなかつた。それがポールには堪え難かつた。……彼は一瞬、自分に性的な本能がないか、あるいは死んでしまつた方が増しだと思つた。しかし彼はミリアムにたいしてまた眼をつぶつた。そうすると彼の血がふたたび荒々しく通いはじめた。」

（本文三五四頁）

一方クレアラとのときは、

「そして間もなく彼の魂は苦悶しなくなつた。彼は忘れた。しかしそのときはもう、クレアラはいなくて、その代りに一人の暖い女がいた。彼がその暗闇のなかで愛し、そして殆んど崇拝の念に近いものを持たずにいられない何物かがそこにあつた。」（本文四二九頁）

ミリアムとのことは重ねて語る必要もないだろう。

クレアラと接触したポールは、生命そのものを前にして、自分達が非常に小さな存在に過ぎない気がして、恐しいようにも思い、驚異の念にも打たれる。たとえてみれば、アダムとイヴが楽園から追放されて、人類の夜と昼を偉大にする未知の力をはじめて知つたのと、どこか似ているかもしれない。それはたしかにポールにとつて一つの開眼である。我が身の重量がその一瞬に消え失せて、生命の洪水が絶え間なく自分を押し流していく。彼の心は――つまり、青春の飢餓は満足して安定する。

クレアラもまたポールと同じように驚異に打たれるが、彼女の場合は、個性の強い近代的な女性が心の秘密を失つたときに感じる、あの寂寥に襲われる。彼女には、その淋しさがポール自身のもつている何物かのゆえであるかのように思えるのだ。つまりポールにすべてを許したクレアラは、自分の恋人をしつかり、いつまでも抱きしめておりたいのである。しかしポールが知つたものは、クレアラという一人の女性ではなく、女である。彼の幸福感は、恋人を通して女性なるものを実感した青年のみが知つているものである。そしてそれは、クレアラに独立した一人の女性の誇りを与えるとともに、いつまでも男を自分につなぎとめておこうとする、女心の落ちつきなさを味わせるのである。

(二) 人間の愛情の底に潜む支配慾

ポールがクレアラと恋愛して実感したものは、人間の男女の愛情のもつ支配慾である。このことはすでに、彼がミリアムと初恋をして、母親の嫉妬に出会つたとき、母の愛情について感じとつている。だが彼がクレアラと一対一の恋愛をして、個性と個性の交りを得たいま、彼ははつきりと実感できたのである。愛すること――実はそれは支配することであるという、人間精神の原則の一つが、父と母との間に、そして現在の自分とクレアラとの間にあると知る。いや、ポールはやがて愛することは争うことでもあると知るようにさえなる。母は父を愛し、父と争つた。そして古い男女の常として

一つ屋根の下に暮してきた。クレアラは新しい女で、夫のバックスターを愛し、彼と争つて別居した。そしてまた、目の前にあらわれた青年である自分を愛し、争おうとしているのだ。こうポールは考えて、人間の男女の愛情に潜む支配慾に苦悩しはじめる。

そのころクレアラと夫のバックスターとの仲が元の鞘におさまろうとしている。クレアラはポールを愛しているが、ポールと会つているといよいよ落ちつかなくなつてくるのである。何故なら、彼女はポールによつて独立した女性の誇りを與えられながらも、自分ではない、もつと大きな女性なるものを自分に要求されているからである。彼女は自分に自信をもつているが、自分が恋人の心を握り得ないことも知つているのだ。もつと平凡に言えば、クレアラは愛せられると信じているものの、自分の尺度を越えたものと較べられて、侮辱されていると感じたのかもしれない。

そして彼女はいまでは、夫のバックスターを愛していないが、夫の方が彼女を愛し、必要としているのに気附いて、ポールから夫のバックスターの方へ傾斜していく。勿論、クレアラはポールを熱愛していることに違いない。しかしこの近代的な女性は愛が争いであると知つていて、これ以上ポールと愛憎の関係を深めたくないのである。それよりは平凡な夫に愛せられて、自分の世界をまもつていきたいのだ。彼女はポールに「君はバックスターがいなくなつたから、奴の方がよくなつたんだよ」と責められて、こんな風に答えている。

――「あのときは素晴しかつたわ。だからはつきり考える勇気がないんだけれど。貴方の欲しいのは私なの？ それともあれなの？」（本文四四一頁）ポールにとつて、あれは青春の飢餓を満すものであり、大いなる生命の源であり、自分の苦悩や不安や苛立ちを押し流してくれる壮麗な流れである。しかしクレアラには、あれはあれ（ii）にすぎずに、幸福と不満のはじまりである。近代の若い女性は、彼女達の恋愛心理において、二つの相反する男性の像に悩まされている。大いなる生命の流れに彼女等を連れ去る男性像と、彼女達の理想や生活感覚や趣味で理解できる男性像とである。

だがポールはミリアムと愛し合うには、青春の飢餓が強すぎたし、自分の生命と母親譲りの潔癖さとの葛藤が深刻すぎた。そしてクレアラとは、いま説明してきたように、近代の男女の愛情と、それゆえの争いの渦にまきこまれて、二人は互に愛し合いながらも憎しみ合つてしまつたのである。こうしてポールは第二の恋愛にも失敗する。

はじめに僕はこう言つた。

――作者が自分の小説のテーマを意識して書き出した。だが小説の進行につれて、作中の主人公ポールが作者のテーマをこえて、自分の切実なモラルを求めようとした、と。

ここで、ポールのモラルの出発點は、彼がクレアラと接触

したその瞬間であると附け加えておこう。作者ロレンスのモラルは『虹』や『恋する女達』あたりで開花して、『チャタレイ夫人の恋人』や『死んだ男』で結実していく。しかしその出発は、実にポールのクレアラにたいするこの実感からはじまつているのである。『息子と恋人』の作者は作中人物のポール・モレルと同じように、強烈な生命力と、飢えと、人並はずれた個我意識を持つていた。そして大胆で、反抗的で、その癖臆病で恥しがりやの男であつた。彼はあらゆる精神主義を忌み嫌い、そのような思想や雰囲気に反逆して、生命を直視し、生命の価値を肯定して自分のモラルを打ち建てようとした。だが一面、彼の個我意識は強く、したがつて傷つきやすかつたので、人と人とのつき合いでは気弱な男であり、いつも孤独な逃亡者の運命を担つていた。

作者ロレンスのモラルが極端な生命主義であるのも、彼がこうした精神のアンバランスな状態を克服して、全人的な人間関係を得ようとした必然的な結果である。そして彼の精神のアンバランスの原因を様々に考えることができる。ロレンスは時代精神の転換期に生れていたから、新旧両世紀の時代精神の激突に影響されていたと言えるだろう。また坑夫の夫と中産階級の出でいくらか教養のある母との、階級的・教養的な混血によるとも言えるだろう。その他に、彼の生命力と肉体力の甚しい差も原因の一つであつてよいわけである。では彼のモラルとは何か？　このことについて僕はすでにいくらかは語つたが、ここでつづけて述べていく必要があるだろうか。『息子と恋人』は彼のモラルの出発點である。しかしそれはあくまでポールの実感であつて、論理の作業も信念の裏づけもまだなにも受けていない、生々しい感覚であるにすぎない。いまはポールの実感だけを語ることに留めたい。

さて話をもとに戻そう。ポールの青春の悲劇はついに母親の死によつて大詰にくる。この章が『解放』(*The Release*)となつているのは意味深い。彼には母親の死が彼の精神の死であつたが、また解放でもあるのだ。彼は母親をなお熱愛していたから、彼は母親の死病いに胸を裂かれる思いであつた。母子の愛情の絆は息子の青春を歪めてしまつた。しかも彼は母親を愛しているので、母親の死だけが息子を救済し得るのである。だがこの解放はポールの若い人生を破壊した後にくるものである。いわば彼の青春は母親とともにあり、母親の死によつて終るとでも言えるだろうか。あるいはポールの愛情の自由は、母の死の床のまえで、彼が絶望的な苦しみを味つたのちに贖われるのかもしれない。もつともポールがそのときこのような思考をしていたわけではない。彼はただ母のことで懸命であつたのだ。そして死病いに苦しむ母親の姿をみて、彼は母に苦しみながら生きてもらうよりは、はやく死んでくれる方が気が楽だと思う。ポールはモルヒネを使つて母親の臨終を早めるのであるが、母の死顔をみて青春の悲劇の結末を知る。――「彼は屈んで夢中で母親の口に接吻

した。しかし彼は自分の口に冷いものを感じた。彼は慄きながら唇を嚙んだ。彼は母親を眺めながら、どんなことがあつても母親と別れることができないという気持になつた。」（本文四八六頁）また彼は、父親が生前の母を懐しんだり、悲歎に暮れながら人々に涙声で話したり、母の面影を夢にみたりしている姿をみる。しかし、父親が心の表面でセンチメンタルになつているのだと思つて、軽蔑の気持をいだく。

その後、ポールは久しぶりでミリアムと教会で会うが、彼は結局、ミリアムに別れの言葉を言うためにミリアムを呼びとめたのである。ミリアムはまだ彼に結婚の意志をしめしていたが、ポールは彼女を棄てようと決心した。彼はミリアムを可愛想に思つているが、彼がミリアムと一緒にいて、彼の切実な要求を押し殺していれば自分を否定することになる。そして彼は自分を否定して、ミリアムを生かすことができるとは思えなかつた。彼等は電車の椅子に並んで倚りそいながら別れていく。彼はそして、自分の青春で、最後の一片だけ残つていた拠點をも失つてしまつたと考えているのである。ここで僕は、昔ポールがこの初恋の女に性の話をしたときの、その言葉を思い出してもよいだろう。（二人の長い交際を通じて、たつた二度しか性の話をしなかつたのだが。）「僕達は自分の純潔について厳しすぎはしないかね――こんなに怖れたり、嫌がつたりするのは一種の不潔だと思わない？」（本文三四三頁）

ミリアムと別れたポールは、電車を降りて、夜の駅の柵にもたれている。

「お母さん」彼は自分を支えているものは母だけだと思う。その母は死んで夜の闇となり、彼を抱くように包んでいる。彼は母にしつかり抱いてもらい、その傍においてもらいたかつた。

「しかし彼は負けたくなかつた。急に振返つて、彼は町の夜空に輝く燐光色の光の方へ歩いていつた。拳を握り、口を固く結んでいた。彼は母親の後を慕つて、暗闇の方向へいきたくなかつた。彼は微かに音をたてている、輝かしい町の方へと、急ぎ足で歩いた。」

これは『息子と恋人』の結びである。僕は言つておこう。ポールが死んだ母親を慕つて夜闇の方向へいかずに、町へと歩いていつたのは嬉しいことだ。町の夜空に電光が輝いているからには、町に多くの人間が住んでいるはずである。ポールが青春の終りに知りはじめたモラルが何であつたにしろ、彼は直観的にそのモラルの在り場所を町だと決めたのである。大いなる生命が、個性的で孤独な近代人を洪水のように押し流すところは――夜空でも、海でも、山麓でも、原野でもなかつた。そこは町であつた。ポールの悲劇は、全人的な愛情をもとめて、精神主義と闘い、敗れ、絶望し、ふたたび町に帰つていく、あまりにも青春的なドラマである。

（本学助教授）

（附記）
僕の引用した『息子と恋人』のテキストはペンギン版である。
ハリー・T・ムアーの研究書とは、
Harry T. Moore: *The Life and Works of D. H. Lawrence*
(London: George Allen & Unwin Ltd. 1951)
である。この小説については、同書の九二頁―一〇六頁、ジェシ・チェンバーズについては、右の箇所及び附録D三六五頁―三八七頁を参照した。

『奥の細道』小見（二）

板坂元

三、「侍り」について

奥の細道の中で「侍り」は動詞または補助用言として三十三個所用いられている。普通、これらは丁寧語として、口語の「ます」「です」「ございます」に云いかえられるものとして説明されているが、その一つ一つを検討して行くとそれらのすべてが簡単な云いかえではかたづけられない場合も少くないようである。実のところカードをとつて分類を試みたけれども結論的なことは出て来なかつたので、一応その現象を指摘するにとどめて大方の御示教を得たいと思う。

（「侍り」が四段活用化していることはすでに諸家の云われているところなのでいちいち註しないことにする）

里の童への来りて教ける、「昔ハ此山の上に侍(はべり)しを、往来の人の麦草をあらして此石を試(こころみはべる)侍をにくみて此谷につき落せハ、石の面下さまにふしたりと云。さもあるへき事にや。（二七・一、例文は前回と同じく杉浦氏の「校註奥の細道」による。句読点、ふり仮名等は筆者がほどこした。数字は頁数行数をそれぞれ示す。以下同じ）

引用された会話文中の「侍り」すなわち「ます」「です」の口語におきかえられるものは右の例をはじめとしていくつか認められる。これについては問題がないわけだが、全体の数からすると頻出の割合は低いようである。